無住涅槃としての転依

――無性造「摂大乗論註」第九章の解読――

片野道雄

はしがき

瑜伽唯識派の鼻祖とせられる無著・世親の瑜伽行唯識説は、ここに改めて述べるまでもなく、大乗仏教の思想史的展開の一環をなすものである。その瑜伽行と言われる大乗の実践的な菩薩道についての瑜伽唯識的な特色は、いわゆる転迷開悟として転識得智する入無相方便道ということにあると考えられる。そして、その転識得智する入無相方便道も、実に三性説と呼ばれる構造をその根底におき、それによって裏づけられるのであり、そのことはすでに無著・世親によって、あらわに発揮せられたことでもある。[1]

大乗仏教思想の概論書としてとくに重要な位置をしめる無著の「摂大乗論」の構成の上で、それら入無相方便道の概述せられている章は、第二章「所知相章[2]」を基本として、まさしく第三章「入所知相」以下終章第十章に亙っている。それら各章において、順次、唯識性への悟入（第三章）六波羅蜜多（第四章）、十地（第五章）、戒定慧の三学（第六、七、八章）、無住涅槃（第九章）、仏の三身（第十章）を中心にして詳説されている。周知のごとく「摂大乗論」は序章及び十章から構成されているが、その序章[3]の劈頭に「大乗によく悟入した菩薩が大乗の大性[4]（偉大さ）を称説するために、世尊の御前で、すなわち大乗に関して大乗アビダルマ経の中で、十種の殊勝によって殊勝せられた言葉が説かれた」と述べ、続いて、十の殊勝語を掲げてい

るごとく、「摂大乗論」の十章の構成は、菩薩によって説かれたそれら諸仏世尊のあらゆる言葉を集約する根本の言葉としての十の句にもとづいている。それによって、無著自身の仏教思想の根本として大乗の大乗仏教たる所以が概述せられたものと理解せられる。

ところで、見道へ貫き入る位置としての初地から第十地へと進展する十地の菩薩行という階梯を経て究竟せられ、波羅蜜多が実修せられるとき、学（śikṣā）に勤行するのであるから、「摂大乗論」の第六、七、八の各章においては戒定慧の三学が立てられる。三学とは道のことでもあって、その道の果なる断滅の世界が、次の第九章「彼果断章」として展開せられてきている。第九章は菩薩によって説かれた根本の言葉の中の一句「それ〔学〕の果なる断滅[5]の殊勝によって殊勝せられた言葉」にもとづくことはもとよりであるが、そこにいう「断」とは煩悩障と所知障との二障の断滅を示すものでもある。[6] 序章において「無住涅槃はそれ〔学〕の果なる断滅として説かれる」とも述べているように、第九章の下ではその道の果なる断滅の究竟せられていく動向（無分別智→後得清浄世間智）として無住涅槃の実践が説明されている。従って、第九章は仏の三身を詳述する第十章とも密接な関連性をもって設定せられているのであり、それはまた、三性説の構造をその根底におき、転識得智の得智の世界を概述するものであって、転依という思想によって裏づけられることを基本とする。[7]

註

① これらの点について先覚によって数多くの論究の試みられていることはすでに述べるまでもないが、近ごろ、荒牧典俊京都大学助教授は「三性説ノート」(一)(二)(『東洋学術研究』第十五巻第一号、第二号所収）において瑜伽行・三性説の成立を中心にして推敲されている。

② 拙著『インド仏教における唯識思想の研究—無性造摂大乗論註所知相章の解読—』（昭和五十年十月、文栄堂）を併せて参見せられたい。

③ 「摂大乗論」の研究については前註②に掲げる拙著において紹介したことでもあるが、序章に対する原典的研究として、特にÉ・ラモット教授の研究、長尾雅人教授の漢蔵本対照研究（『東方学報』京都第十三冊第二分所収）、荒牧典俊「摂大乗論の序章」（『インド学試論集』Nos. 6—7 所収）があり、筆者の理解はそれら既往の労作によるところが多い。

④ 周知のごとく、「大乗荘厳経論」功徳品第五十九・六十の二偈をはじめ、「中辺分別論」の安慧註などでは大乗の七種大性として表示説明されている。「中辺分別論」の安慧註によると、次のごとくである。

tac ca saptavidhamahattvayogān mahat / yānty anena prāpnuvanty apratiṣṭhitaṁ nirvāṇam iti yānam / saptavidhaṁ punar mahattvam ālambana-pratipatti-jñāna-

vīrya-upāya-prāpti-karmamahattvam / (ed. S. Yamaguchi, p. 200, *ll.* 18—21)

それらについて山口訳註三一九—三二〇頁、及び、三二一頁註⑤参照。なお、同じく安慧註のその直後に upāyakauçalyamahattvaṁ saṁsāranirvāṇāpratiṣṭhānāt (ibid., p. 200, *ll.* 25—26) という言葉を見る。「摂大乗論」の無性註では本論の「大乗」を解釈する中で、rgyas par bya na chen po rnam pa bdun daṅ ldan paḥi phyir te / byaṅ chub kyi phyogs daṅ mthun pa rnams daṅ / pha rol tu phyin pa rnams daṅ / bslab pa rnams daṅ / gshi daṅ rtags la sogs pa ni theg pa chen poḥo / (Peking 233b[8]—234a[1]) (大正蔵経三一、三八〇頁b参照) というのみで、七種の一々については説明していない。

⑤ この言葉に対して無性註は次のように述べている。bslab pa ḥdi rnams kyi ḥbras bu ni deḥi ḥbras buḥo // de ni de ḥbras bu yaṅ yin la spaṅs pa yaṅ yin pas deḥi ḥbras bu spaṅs pa ste / glo bur gyi sgrib pa daṅ bral ba de bshin ñid rnam par grol baḥo // mi gnas paḥi mya ṅan las ḥdas pa ni shi ba ñid du mthoṅ baḥi phyir ḥkhor ba ñid mya ṅan las ḥdas pa ste / de çes pa ni chags paḥi gnas ma yin no // phuṅ poḥi lhag ma med paḥi mya ṅan las ḥdas paḥi dbyiṅs ni mi (Derge, mi 欠) gnas pa ma yin no // de ñid khyad par te / tes ḥdi dag gi gsuṅ khyad par du ḥphags so / (Peking 236a[5-8]) (大正蔵経三一、三八一頁c参照)

世親註における説明は次註⑥参照。

⑥ 序章に対する世親註及び無性註による。世親註では次のような訳述も知られる。

spaṅs paḥi khyad par shes bya ba la / khyad par du ḥphags paḥam / rab tu dbye bas sam / so so raṅ gi rig pas ñon moṅs pa daṅ / çes byaḥi sgrib pa spaṅs pa ste / de yaṅ mi gnas paḥi mya ṅan las ḥdas paḥo / (長尾雅人「摂大乗論釈の漢蔵本対照」『東方学報』京都第十三冊、第二分、一五二頁一〇行目以下参照)

〔……de la〕 deḥi ḥbras bu daṅ / deḥi spaṅs pa ni deḥi ḥbras bu spaṅs paḥo // deḥi ṅo bo ni deḥi ḥbras bu spaṅs pa ñid de // 〔ñon moṅs pa daṅ〕 çes byaḥi sgrib pa spaṅs pa shes bya baḥi don to / (前記長尾対照本、一五八頁二行目以下参照)

⑦ 「摂大乗論」におけるそれらの思想の解明のためには、すでに述べるまでもなく、少なくとも第九、十章が併せて考察されるべきであろう。ここでは、「摂大乗論」第九章に限定して、それに対する無性註のチベット訳を中心にした解読を試み、第十章に対しては稿を改めることとする。

摂大乗論の無性註第九章に対する解読

〈凡例〉

一、本試訳文の中、摂大乗論本文は佐々木月樵『漢訳四本対照摂大乗論附西蔵訳摂大乗論』(略称・佐々木本)を底本として、北京版チベット大蔵経(略称・Peking)所収のテキスト、デルゲ版チベット大蔵経(略称・Derge)所収のテキスト、および

É. Lamotte: La Somme du Grand Véhicule（略称・L.）所収のテキストを参照し、無性の註釈は北京版チベット大蔵経所収のチベット訳を底本として、デルゲ版所収のテキストを参照した。無性註の試訳の文中で、サイドラインを附してある部分は「摂大乗論」本文である。また、〔　〕内は本文その他によって補う言葉であり、（　）内は直前の語句を説明する言葉である。

一、本論文に対する漢訳四本は佐々木本を、世親註の漢訳三本（この章に対するチベット訳は脱落）および無性註に対する漢訳一本は大正蔵経所収のものを参照した。

一、論の本文に対する註記は最小限にとどめた。註記の中、「玄奘訳」は無性造「摂大乗論釈」（第九章は、大正三一、四三四頁c—四三五頁c）のそれを、「玄奘訳世親註」（第九章、大正三一、三六九頁a—三七〇頁a）、「真諦訳世親註」（第九章、大正三一、二四七頁a—二四九頁b）、「笈多共行矩等訳世親註」（第九章、大正三一、三一一頁c—三一二頁b）は世親造「摂大乗論釈」の各々を表わす。

一〔無住涅槃と転依〕

〔本文〕以上のように〔直前の章において〕増上慧（すぐれた智慧）の殊勝（adhiprajñāviçeṣa）は説かれたのである。

〔そこで〕断滅の殊勝（prahāṇaviçeṣa）は如何に見られるべきかと云えば、諸菩薩にとって断滅とは無住涅槃（apratiṣṭhitanirvāṇa）である。それの本質（tallakṣaṇa）は雑染①（saṁkleça）が捨てられることにともなうのであり②、〔かつ〕輪廻を捨てない〔二の〕所依（āçraya）であって、転依（āçrayaparāvṛtti）である。

その中、輪廻とはかの依他起性が雑染分として関係したものである。涅槃とはかの〔依他起性〕そのものが清浄分として関係したものである（vyavadānāṁçikaḥ）。所依（āçraya）とはかの〔依他起性〕そのものが両者の分として関係したものであって、依他起性である。転依③とは、かの依他起性そのものに対治（pratipakṣa）の生じたとき、雑染分を転捨（vyāvṛtti）して清浄分に転換すること（parāvṛtti）である④。（佐々木本、p. 137, *l.* 9～p. 138, *l.* 4; L. IX—1）

〔無性註〕所対治分（vipakṣa）が断ぜられるが故に、無分別智は能対治性（pratipakṣatva）〔となるの〕であるから、それ〔増上慧の殊勝〕に続いて断滅の殊勝が説かれる。

無住涅槃とは、世間の人や声聞のごとくに輪廻や涅槃に住しないからである⑤。雑染が捨てられることにともなうとは、諸々の雑染なるものにしてそれらが捨てられることにともなうのであって、それの力を害とするからである⑥。輪廻を捨てない〔二の〕所依であって、転依であるとは、か

の転依において〔四〕無色〔界〕のごとく住することは智慧の殊勝と相応する故に、諸煩悩の機会をも開かなく、悲という利他[9]によって輪廻をも亦棄捨しない。[10]

所依とは何か、それの転換とは何かと云えば、[11]輪廻とはかの依他起性〔が雑染分として関係したものである〕というように示されている。[12]輪廻とは迷乱なる諸心心所であって、生と死とのロープの上に不確かな相続が断ち切られていないからである。雑染分とは、遍計執された形相の分によるのである。涅槃とはかの〔依他起〕そのものが清浄分として関係したものであって、遍計執された存在のない分として関係したものである。[13]所依とはかの〔依他起性〕そのものが両者の分として関係したものであって、依他起である。[14]何の所依であるかと云えば、転換の、であって、〔その語に〕結合するからである。それ〔所依の〕転換とはすなわち円成実である。あるいは、仏の諸法の所依であって、

〔十〕地と波羅蜜多とは仏法の所依である。
転依は果であって、法身であるといわれる。[15]

と説かれているごとくである。[16]ところで、如何に転換し、それ転換とは何かと考えられるので、かの迷乱の自体である依他起に対治の生じたときと言って、無分別智の生じたときである。雑染分を転捨してとは、所取能取性なる迷乱の分をである。[17]転捨とは転換（parāvṛtti）である。清浄分に転換することとは、所取能取を離れた体（bhāva）としてであって、所取能取の無性は自内証されるべき（pratyātmavedanīya）〔で、〕不可言説（anabhilāpya）である。（Peking, 331a^{5}—b^{6}；玄奘訳、大正蔵経三一、四三四c—四三五a参照）

註

① L. によって kun nas ñon moṅs pa に理解する。
② Peking : daṅ bcas pa / …, Derge : daṅ bcas pas….
③ gshan gyur pa を gnas gyur pa として理解する。
④ この一節は、荒牧典俊「摂大乗論の依他起性」（『インド学試論集』Nos. 4—5, 所収）においてサンスクリット文を構成することによってテキストの理解を志し、綿密な論究がなされている。これらの二分依他の思想は本論では第二章所知相 L. II—28 & 29 において、また、第十章 L. X—3(1) においても展開している。第十章のその言葉も荒牧助教授によって次のように換元サンスクリット文が与えられている。

buddhānāṅ dharmakāyasya kiṅ lakṣaṇam / samāsataḥ pañcavidhaṅ vedyam / āçrayaparāvṛttilakṣaṇaṅ sarvāvaraṇasaṅkleçāmçikaparatantrasvabhāve vyāvṛtte saravaraṇavimuktasya sarvadharmeṣu vaçopasthitasya vyavadānāṅçikasya paratantrasvabhāvasya parāvṛtteḥ /（前記荒牧論文、『論集』五六頁）

なお、真諦訳は「転依者対治起時此依他性、由不浄品分、

永改本性、由浄品分、永成本性」。

⑤　玄奘訳「不同世間声聞独覚安住生死或涅槃故」。

真諦訳世親註では「二乗惑滅一向背生死趣涅槃。菩薩惑滅不背生死、不背涅槃。故異二乗。菩薩此滅於四種涅槃中、是無住処。一本来清浄涅槃、二無住処涅槃、三有余、四無余。菩薩不見生死涅槃異。由般若不住生死、由慈悲不住涅槃。若分別生死則住生死、若分別涅槃則住涅槃。菩薩得無分別智、無所分別故無所住」。ここの真諦訳の文中に見られる四種涅槃は周知のごとく『成唯識論』巻十にも展開している。

なお、本論序章に対する世親註の劈頭で、偈頌の形で、無分別の故に輪廻に住せず、慈悲あるが故に涅槃に住しない無垢なる智慧の世界を表白している。無住涅槃という言い方は多くの仏教テキストの上にしばしば展開するところであるが、次に示すごとき「中辺分別論」の安慧註の一文もそれを詳述するものである。

kiṁ tad apratiṣṭhitaṁ nirvāṇam / bodhisattvāvasthāyāṁ tāvat karmopapattivaçitāsanniçrayeṇa kāruṇikatvāt saṁsāropapattiḥ prajñābalena tatrāsaṅkleçaḥ / tad idaṁ bodhisattvānām apratiṣṭhitaṁ nirvāṇaṁ vidhīyate / saṁsārāvasthito 'pi pṛthagjanavat saṁkliṣṭo na vartate / na çrāvakādivan nirupādāno nirvāṇa iti / tathāgatāvasthāyām api kleçajñeyāvaraṇaprahāṇān na saṁsāre pratiṣṭhitaḥ / nirupadhiçeṣe nirvāṇe naiva pratiṣṭhito dharmakāyasyānucchedāt sāṁbhogikanairmāṇikakāyayor yāval lokas tāvat parārthakaraṇāt / (ed. S. Yamaguchi, p.187, *ll.*14—22)

そして安慧は「輪廻と涅槃とに住せず」ということは「心の調柔性」による、とか、「輪廻と涅槃とに住しない菩薩は不動なる不退転地に住する」（「中辺分別論」安慧註、山口訳註、四〇五頁参照）とも言う。普通、無住涅槃の説明としては「智慧あるが故に輪廻に住せず、慈悲あるが故に涅槃に住せず」といって、無住涅槃の実践は二つの住の否定によって表わされる。先覚の注意するように、二つの否定が並列的に唱えられているのではなく、無分別智のはたらきを指示するとともに、衆生世間を浄化しようとする世間清浄智のはたらきを示す。そのことが本論第十章において「無住（apratiṣṭhita）にして住（prasthita）」（諸仏の法身の甚深性を語る偈頌の中の一句）とも示されている。無性はその句に対して「輪廻と涅槃とに無住にして住（mi gnas pa la rab tu shugs pa）であって、無住涅槃という意味である。」（Peking, 346a$^{4-5}$）と解説している。

⑥　テキストは ñon moṅs pa であるが、註①と同様に、kun nas を補って理解する。玄奘訳「雑染」。

⑦　玄奘訳「以捨雑染不捨生死者、害彼勢力如彼呪蛇、雖不棄捨、而無染故」。

⑧　無性はまた前章に対する註釈の中で、byaṅ chub sems dpaḥ rnams ni saṅs rgyas su gyur nas gzugs med bshin du chos kyi skus ḥkhor ba ji srid par gnas so /（Peking, 330a^{4}）という。

⑨　sñiṅ rjeḥi gshan gyi dbaṅ gis…ṅe…gyi don gis…として理解する。

⑩　玄奘訳「二所依止転依為相者、或依主釈或持業釈。住此転依如無色界、若依自利与殊勝慧共相応故、不容煩悩。若依利他由与大悲共相応故、現処生死、而不棄捨」。無性はまた前章

で、*ñan thos rnams ni mya ṅan las ḥdas pa gnas so // byaṅ chub sems dpaḥ rnams ni sñiṅ rje daṅ ye çes kyi dbaṅ gis mya ṅan las ḥdas pa la mi gnas so* /（Peking, 330a$^{2-3}$）という。

玄奘訳世親註では「謂住此転依時、不容煩悩、不捨生死」云々という。

⑪ 玄奘訳「此中、何者生死涅槃依止転依、皆応顕説」。

⑫ 玄奘訳「謂心心法煩悩迷乱生死 過失 相続 不絶、遍計所執分」。

⑬ 玄奘訳「謂畢竟転遍計所執、円成実分」。

⑭ 玄奘訳「謂二所依依他起性。転依謂即依他起性者、謂心心法依他起性、是諸雑染転滅所依。又是一切仏法所依。如有説言、此是一切仏法、諸地波羅蜜多果」。

⑮ 玄奘訳では前註に見られるように偈頌の態でない。なお、この偈は本論第四章に対する無性註にも引用されている。Peking, 310b$^{2-3}$. その個所に相当する玄奘訳「地及到彼岸、諸仏法所依、転依法身等、諸功徳為果」（大正三一、四二二b）。

⑯ 玄奘訳「所依等云何転依、何者転依。謂即於此依他起性、対治起時者、無分別智……」。

⑰ 玄奘訳「転滅……迷乱分」。

⑱ 玄奘訳「転得清浄分者、捨彼所取能取性故、転得遠離所取能取、自内所証、絶諸戯論最清浄分」。Peking : ldog pa ni gshan du gyur paḥo / ….

なお、真諦訳世親註には、次の言葉が見られる。「道未起時、戒等浄品未成立。但有本性清浄。由道起故、与五分法身及無垢清浄相応。如此相応乃至得仏、無有変異。故言永成本性」。この説明に相当する本論の真諦訳は註④にも示す。玄奘訳世親註は「何者転依。謂即此性対治生時、捨雑染分、得清浄分」とあって、真諦訳に見られるような「道未起時、……但有本性清浄」の思想はその他の諸訳にはない。

二〔転換の六種および四偈〕

〔本文〕さらに、その転換①は要約すると六種であって、すなわち、

(1) 力弱くなして増大する転換（daurbalyakāraṇapa-ripuṣṭi-parāvṛtti）②は、信解（adhimukti）によって、聞熏習にもとづくものと、慚愧（hīru）を有するものに、ただ僅かの煩悩のみが起行（samudācāra）し、あるいは起行しないからである。

(2) 通達による転換③（prativedha-parāvṛtti）は、地に入った諸菩薩にとってで、第六地に至るまで、真実と非真実との顕現、〔不顕現〕が現前せる（pratyupasthita）からである。

(3) 修習による転換④（bhāvanā-parāvṛtti）は、障（āvaraṇa）を有するものにとってで、第十地に至るまで、一切の相⑤（nimitta）は不顕現であり、そして、真実は顕現せるからである。

(4) 果円満という転換⑥は、障のないものにとってで、一

切の相（nimitta）は不顕現であり、極清浄なる真実が顕現し、そして、一切の相において自在を得ているからである。

(5)　劣れる転換[7]（hīna-parāvṛtti）は、声聞たちにとって、人無我を了解し、輪廻に背向して輪廻を全く捨てているからである。

(6)　勝れた転換[8]（audārya-parāvṛtti）は、諸菩薩にとって、法無我を了得し、〔輪廻〕そのものにおいて寂静を見て、雑染を断滅してそれ〔輪廻〕を捨てないからである。

「劣れる転換」が菩薩の上にあるとき、如何なる過悪（ādīnāva）があるかと云えば、有情利益を顧慮しないから、菩薩の法性を侵しているのであって、劣乗の人々と解脱（vimokṣa）の等しい過悪となるのである。

諸菩薩にとっての「勝れた転換」には如何なる讃嘆（anuçaṁsa）があるかと云えば、自らの転依の事体（vastu）として輪廻の一切法において自在を得ているからである。すなわち、一切趣に一切有情の身を示して調伏する種々なる方便善巧（upāyakauçalya）をもって、〔世間の〕盛栄なるものや三乗の人々を調伏し、導き入らしめること（saṁniveçana・安立）が讃嘆される。ここに偈頌がある。

(a)　凡夫たちにとっては真実を覆うて、非真実がことごとく顕われる。
　けれども、諸菩薩にはそれ〔非真実〕が捨離されて、真実がすべてに顕われる。[9]（cf. Sūtrālaṁkāra, XIX—53）

(b)　無なる義と有なる義とが不顕現と顕現として知られるべきである。
　〔それは〕所依が転換することであって、意のままに実行[10]するから解脱である。[11]（ibid., XIX—54）

(c)　輪廻と涅槃とが平等として、もし智が生ずれば、そのとき、それ故にそこでは実に、輪廻こそ涅槃となる。

(d)　だからして輪廻は捨てられず、〔また〕捨てられないので〔も〕ない。
　それ故に涅槃も亦得られず、〔また〕得られないので〔も〕ない。（佐々木本、p. 138, l. 4～p. 140, l. 8; L. IX—2 & 3）

〔無性註〕(1)　力弱くなして増大する転換といって、信解の力によって、聞熏習を生ぜしめる力をもって異熟識に[12]

もとづく煩悩の熏習を力弱くなして、清浄（vyavadāna）が増大する[12]（āpūryate）。信解と聞熏習にもとづいているのであるから、慚愧を有するものに、ただ僅かの煩悩が起行し、あるいは起行しないことになる。

(2) 通達による転換は地に入った諸菩薩にとってで云々といい[13]、真実と非真実との顕現〔不顕現〕といって、間断をともなって、又は間断なく無分別智が起行するのであるから、そこにおいて、あるときは真実が顕現し、あるときは非真実〔が顕現する[14]の〕であって、出観（vyutthita）に続いて、第六地に至るまでである[15]。

(3) 修習による転換は障を有するものにとってで云々とは、所知障による障を有するものとなっているものにとって、一切の相は[16]不顕現であり、そして、真実が顕現するという転依であって、十地に至るまでである。

(4) 果円満という転換は障のないものにとってで云々とは、一切の障による障のなくなっているものにとって、一切の相が不顕現となっているのであり、そして、一切の障はあり得ないから、それは極清浄なる真実が顕現し、そして、それらの相において自在の了得（pratilabdha）を立場としている。すなわち、相において自在を得る（labdha）という、そのことをもって、欲するままに有情利益をなすのである[17]。

(5) 劣れる転換は容易に知られるのであって、すでに説かれているものによってそれは説明されている[18]。

(6) 勝れた転換は諸菩薩にとってで云々のなか、雑染を断滅してそれ〔輪廻〕を捨てないからとは、[19]雑染なる輪廻〔において〕無我なりと証得するとき、雑染はあり得ないからである。しかも、それ〔輪廻〕を捨てないとは、輪廻それこそにおいて寂静を見るからである。

劣れる転換の過悪は容易に知られるから説明しない[20]。

勝れた転換の讃嘆は、[21]一切法において自在を得て、かの一切の同分の身を示現し、[22]種々なる方便をもって、[23]盛栄なるもの（abhyudaya）、〔すなわち〕世間的な達成を遂げるもの（laukikasampad）や三乗における所化に関わる人々を調伏し、導き入らしめるのであって、[24]〔すなわち、その〕法性の了知が讃嘆されるのである。[25]

転依を主題（adhikāra）として偈頌がある[26]。

(a) 凡夫たちにとっては真実を覆うて、非真実がことごとく顕われる云々という。無明の未だ断じられていない人々にとっては真実は不顕現であって、それ故に、〔真実を〕覆うという。凡夫たちにとっては、真実が覆われて、無明によって非真実がことごとく顕われているように、そのよう

に諸菩薩には〔顕われてい〕ない。無明が断じられているが故に、彼等〔菩薩〕には真実が顕われるのであり、道理によっても非真実は〔顕われ〕ないと了解されるからである。

(b)　従って、無なる義と有なる義とが不顕現と顕現として知られるべきであるという中、不顕現とは無なる義すなわち、遍計所執がである。顕現とは有なる義、すなわち、円成実がである。非真実が顕現しないことと、真実が顕現することがいわゆる転依である。意のままに実行するから解脱であるとは、転依そのものが解脱であって、自在が存在するからである。世間においても、意のままに実行することを得るのは意のままに実行するのであるから解脱といわれる。

(c)　輪廻と涅槃とが平等として、もし智が生ずればという中、輪廻とは遍計所執性であり、そして、それなる存在の無性が空性であり、空性こそ実に涅槃という。

(d)　従って、〔輪廻は〕捨てられずという。何となれば、輪廻こそそれは涅槃することになる〔からである〕。捨てられないので〔も〕ないといって、何となれば、それはまた輪廻において輪廻の想が起きない〔からである〕。〔涅槃も亦〕得られずといって、何となれば、輪廻を離れて涅槃は得られない〔からである〕。得られないので〔も〕ないといって、何となれば、〔涅槃〕そのものはそれ〔輪廻〕にとっての涅槃である〔からである〕。〔以上が〕断滅〔の章〕の註釈である。（Peking, 331b⁶～332b⁸；大正蔵経三一、四三五a－c参照）

註

① 漢訳では、仏陀扇多訳が「転身」となっている以外、他の三訳はともに「転依」と訳している。

② 玄奘訳「損力益能転」、笈多共行矩等・真諦の両訳「益力損能転」、仏陀扇多訳「作微弱益廻」。

③ 仏陀扇多が「得証廻」と漢訳する以外、他の漢訳三本は「通達転」。

④ 仏陀扇多が「修転」と漢訳する以外、他の漢訳三本は「修習転」。
　真諦訳世親註「一切相、謂相相生相真実相。此三相体不顕現。依止此転依得成。三無相得顕現、亦依止此転依得成」。

⑤ 「荘厳経論」安慧註に、mtshan ma ni ḥkhor babi chos la byaḥo (Peking, Tsi. 246a³), mtshan ma ni gzuṅ ba dan ḥdsin pa la sogs pa ste (Peking, Tsi. 246b⁵)という。

⑥ 仏陀扇多が「満果廻」と漢訳する以外、他の漢訳三本は「果円満転」。

⑦ 仏陀扇多が「微小廻」と漢訳する以外、他の漢訳三本は「下劣転」。

⑧ 仏陀扇多が「上廻」と漢訳する以外、他の漢訳三本は「広大転」。ただし笈多共行矩等訳「曠大転」。

⑨ この偈頌のチベット訳、
byis pa rnams la yaṅ dag bsgribs // yaṅ dag ma yin kun tu snaṅ // de bsal (Derge : bstsal) yaṅ dag thams cad du // byaṅ chub sems dpaḥ rnams la snaṅ /

Mahāyāna-sūtrālaṁkāra, XIX 53,
tattvaṁ saṁchādya bālānāmatattvaṁ khyāti sarvataḥ /
tattvaṁ tu bodhisattvānāṁ sarvataḥ khyātyapāsyatat / (byis pa yaṅ dag ñid bsgribs nas // yaṅ dag ma yin kun tu snaṅ // byaṅ chub sems dpaḥ de gsal (Derge : bsal) nas // yaṅ dag ñid ni kun tu snaṅ /)

⑩ ここに試訳する「意のままの実行」のチベット訳は次註に示すごとくであるが、「荘厳経論」によると kāmacāra (ḥdod dgur spyod). 無性註所引の本文は ḥdod dgur sgyur phyir…（意のままに廻向するから）である。

⑪ この偈頌のチベット訳、
don med pa daṅ don yod pa // mi snaṅ snaṅ bar çes par bya // gnas ni gshan du gyur pa de // ḥdod dgur rgyu phyir thar pa yin /

Mahāyāna-sūtrālaṁkāra, XIX 54,
akhyānakhyānatā jñeyā asadarthasadarthayoḥ / āçrayasya parāvṛttirmokṣo 'sau kāmacārataḥ // (don med pa daṅ don yod daç // mi snaṅ snaṅ ba ñid çes bya // de ni gnas gshan gyur pa ste // ḥdod dgur spyod phyir thar pa yin /)

⑫ 玄奘訳「損減依附異熟識中煩悩熏習、増益所習浄法功能」。玄奘訳世親註「損減阿頼耶識中煩悩熏習力故、増益彼対治功能故、得此転依」。

⑬ Derge の …shes bya ba la sogs pa sde / による。

⑭ Derge の res ḥgaḥ ni de kho na ma yin pa snaṅ ste / による。

⑮ 玄奘訳「或時真現、謂入観時、或非真現、謂出観時。非真与真於此二時、如其次第、説現不現。此現不現乃至六地」。

⑯ Derge : yoiṅs su rdsogs par gyur pa ni sgrib pa med pa rnams kyi ye çes. ここでは Peking による。

⑰ 玄奘訳「……真実顕現、依此転依、於一切相得大自在。以於諸相得自在故、随其所楽、利益有情」。
なお、真諦訳世親註では、「三徳具足名果円満。……一切相不顕現、即是断徳。……清浄真如顕現、即是智徳。……至得一切相自在、即是恩徳。……」。
「自在の了得」について、本論第十章においては、その劈頭の仏の三身の概述の中、自性身の説明で「一切法自在転所依止」（玄奘訳による）といい、また、法身の五相の概述の中、「転依の相」の説明（L. X—3〈1〉, 本稿四一頁註④下参照）、或は、L. X—3(2) に見られる「得十自在」、L. X—5 などが注意せられる。「大乗荘厳経論」菩提品第四十五偈では「所依の転換においては、諸仏の不動なる処において、無住涅槃なる勝妙なる自在を得る」という。

⑱ 玄奘訳「其言易了、無煩重釈」。
玄奘訳世親註「唯能通達一空無我、不能利他故、是下劣」。

⑲ 玄奘訳「於雑染断而不捨。於生死中、達無我故、断諸雑染、即於其中見寂静故、而不棄捨」。
玄奘訳世親註「由並通達二空無我、安住此中、捨諸雑染、不捨生死、兼利自他故、是広大」。

真諦訳世親註「此顕法無我観功能。於生死中、由観寂静、能離分別、不為惑染故、捨煩悩。由見生死寂静与真如不異故、不捨生死」。

⑳ 玄奘訳「其文易解」。なお、真諦訳世親註では、恩徳、智徳、断徳とを失することを示すとして説明されている。

㉑ Derge: …phan yon ni による。

㉒ 玄奘訳「於一切趣示顕一切同分之身」。
本論第十章劈頭における変化身の概説に対する無性註に、skal pa can rnams kyi rgyud gshan dag la miṅ daṅ skal pa mñam par snaṅ baḥi rnam par rig pa rnams ḥbyuṅ ṅo /（Peking, 333a⁸）（玄奘訳「此即能令余相続中、与人同分識生起」大正蔵経三一、四三六a）という。

㉓ Peking: …thabs rnam pa sna tshogs kyi（Derge: kyis）mṅon par mtho ba ḥjig rten paḥi phun sum tshogs pa daṅ // theg pa gsum la gdul ba la skal pa can rnams ḥdul shiṅ ḥgod de chos ñid khor du chud par byed pa ni phan yon yin no /
玄奘訳「種種調伏方便善巧、安立所化有感有情、置最勝生及三乗中。最勝生者、謂諸世間安楽生処。応知此是説法功徳」。
玄奘訳世親註「於最勝生及三乗中、種種調伏方便巧智、安立所化難調有情。是為功徳。此中意取世間富貴、為最勝生」。笈多共行矩等訳世親註「以種種調伏方便智、調伏安立於富楽及三乗中。此為功徳。是中富楽者是世間果報故」。
真諦訳世親註は「富楽是三界善道。先令得世間善道、後令得三乗聖道、以三輪化度、令住正法」と訳述し、更に「何法為大菩提自性。転依異二乗是大菩提自性。此転依応知。有四相。一生起依止為相、二永不生依止為相、三成熟思量所知果為相、四法界清浄為相。……」以下、真諦自らの詳細な説明が見られる。

㉔ Derge の …kyis による。なお、無性註は本文の「方便善巧」をただ「方便」とのみ用いているが、重要な言葉であることに差異はない。山口益『世親の浄土論』一七一―一七七頁参照。そこでは「摂大乗論」の「彼修差別章」の言葉を引いて詳述している。同書一七二―一七三頁にも注意しておられるように、「中辺分別論」の安慧註においては方便善巧をもって無住涅槃を表示する用例も見られる。

㉕ 玄奘訳「為顕転依、復説多頌」。
玄奘訳世親註「為顕転依、故説多頌」。
真諦訳世親註「為顕此転依故重説偈」。

㉖ 玄奘訳「無明断故、通達虚妄皆無所有故、名捨妄。唯有真義一向顕現。由此道理」。

㉗ 玄奘訳「円成実真義顕現、遍計所執非真実義皆不顕現」。
玄奘訳世親註「遍計所執非真不転。円成実相真義転故」。
真諦訳世親註「虚妄是分別性。分別不起即虚妄不顕現。真実是三無性。虚妄不顕故真実顕現」。
なお、「荘厳経論」安慧註では「功徳品」におけるこれと同じ偈頌の註釈の下で、yod paḥi don ni stoṅ pa ñid la / med paḥi don ni gzuṅ ḥdsin gyi mtshan ma rnams te/（Peking, Tsi. 247b¹）と説明している。

㉘ 玄奘訳「謂即転依名為解脱」。
玄奘訳世親註「即此転依解脱相応」。
真諦訳世親註「不顕現顕現是菩薩転依。此転依即菩薩解脱」。

㉙ Peking : …ḥjig rten na yaṅ ḥdod dgur rgyu ba (Derge: sgyur ba) ḥthob pa ni….

玄奘訳「随欲自在行者、謂此転依解脱自在、於諸世間得随欲行。由随所欲、所作自在故名解脱。非如斬首捨離身命、名為解脱」。

真諦訳世親註「得解脱已無復繫縛。為利他故、如意遍行於六道中……」。

玄奘訳世親註「謂此解脱随其所欲、自在而行、非如声聞所得解脱、猶如斬首、畢竟安住般涅槃故」。

笈多共行矩等訳世親註「如意欲行皆得解脱。非如声聞畢竟涅槃、猶如斬首、得如是解脱」。

㉚ 玄奘訳「謂遍計所執自性名為生死。此即無性、無性即空、空即涅槃、円成実性」。

玄奘訳世親註「謂於生死及於涅槃、起平等智、由此二種無別性故、……又此二種云何平等。以諸雑染、名為生死。即雑染法無我之性、名為涅槃。菩薩通達諸法無我、平等智生、見彼諸法皆無自性。諸有生死即是涅般。以於其中見極寂静即涅槃故」。

真諦訳世親註「生死涅槃、並是分別所作、同一真如。若得無分別智、縁此平等起」、「不浄品名生死、浄品名涅槃。生死虚妄、無人法二我、即是涅槃。得無分別智、見生死無所有、即是見涅槃無所有。故無此彼之異」。

㉛ 玄奘訳「由是於生死非捨非不捨等者、謂即生死是涅槃故、説名非捨」。

玄奘訳世親註「諸有生死即是涅槃。是故不捨。即是無別有可捨義。即於其中、見無性故」。

真諦訳世親註「雖観無我、不離生死。是非捨義」。

㉜ 玄奘訳「無復生死名想転故、名非不捨」。

玄奘訳世親註「離諸雑染、名非不捨」。

真諦訳世親註「雖在生死、常観無我。是非非捨」。

㉝ 玄奘訳世親註「離生死外無別涅槃而可証得。故名非得」。

真諦訳世親註「離生死無別法名涅槃。菩薩既不得生死、亦不得涅槃。是無得義」。

㉞ 玄奘訳「即於此中、証涅槃故、名非不得」。

玄奘訳世親註「於其中見寂静故、雖無性別、而証涅槃。名非不得」。

真諦訳世親註「菩薩於生死、常観勝妙寂静。是無不得義」。

笈多共行矩等訳「由於彼法見其寂静、与涅槃無有差別。是故非非得。釈学果寂滅竟」。

（本学助手　仏教学）